

# DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

ダイバーシティ  
イン・ジ・アーツ  
ペーパー



10



## FEATURE

### 02 | ともにかける ～ARTの伴走者～

あとりえすずかけ  
たんぽぽの家  
はじまりの美術館

12 | ART GALLERY  
中村真由美・舛次崇  
川上建次・前野一慶

18 | INTERVIEW  
村本大輔・西村宏堂

22 | イッセー尾形の  
妄ソー芸術鑑賞



# とともに

ARTの伴走者

# かける

姉次崇作品より。  
「樞木鉢の花 赤と黒」バスレル・水彩紙  
545×766mm / 1994年

ARTが生まれる現場には

作家と共に走る伴走者が傍らにいます。

サルバドール・ダリのそばに妻のガラが、

岡本太郎のそばに養女の敏子が、

ヴァン・ゴッホに弟のテオがいたように。

それぞれの距離やスタンスで、誰かが傍らにいます。

伴走者は道を明かりで照らし、励まし、励まされ、

泣き、笑い、時に道に迷う。

だけど、伴走者がいるからこそ、

作家は遠くまで行くことができるのかもしれない。

今回は作家と伴走者の関係をレポートします。



ともにかける  
～ARTの伴走者～  
01

舛次崇さん

仲間

Place:  
あとりえずすかけ



# 仲間からののがきが展覧会をうんだ。

そののがきは、5年ほど前の新年に届いた。受け取ったのは、〈あとりえずすかけ〉(兵庫県)のスタッフ・三栖香織さん。はがきには「僕(舛次崇)の展覧会をしてください」と書かれていた。この「僕」こと、富塚純光さんは〈あとりえずすかけ〉に在籍している作家で、舛次さんは作家仲間だ。舛次さんとの展覧会開催への思いには並々なぬものがあったのだろう。あとからわかったことだが、富塚さんは三栖さんだけでなく、美術館の学芸員など少しでも可能性がありそうな人に同様ののがきを送っていたそうだ。

「富塚さんのなかで舛次さんの存在は特別なんです。ライバルでありながらもアーティストとしてすごい人だと感じているんだと思います」(三栖さん)

## 色を絞って才能が開いた

仲間になんか思いを抱かれる舛次さんの才能を見出したのは、〈あとりえずすかけ〉〈すすかけ絵画クラ

ブ)の立ち上げ人である作家のはたよしこさんだ。

アトリエに通い始めたばかりの頃の舛次さんは、黒のパステルで大好きな甲子園球場のスコアボードの絵ばかりを描いていた。ある日、アトリエにあった植木鉢を唐突に描き始めたのだという。それから野菜、ハンガー、動物など、舛次さんが身近に感じるものがモチーフになった。植木鉢を描いていた初期の頃は、多色使だったが、次第に青、白、茶、黒色と絞られていった。

「この4色は先生(はたさん)が提案しました。色を限定したほうが舛次さんの描く形のおもしろさが見えるんじゃないかと思ったようです。本人たちの絵の魅力を引き出すためには何をすればいいかを、先生はいつも考えていました。舛次さんもチャレンジ精神が旺盛で、先生からの色やモチーフの提案に楽しみながら挑戦しているようでした。先生も舛次さんも互いを尊敬し、信頼しているからできたことだと思います」と三栖さんは言う。

## 突然の別れを乗り越えて

舛次さんと富塚さんの展覧会について「ぜひやりなさい」と、三栖さんの背中を押したのははたさんだった。開催において大きな課題だった予算の目処も立ち、三栖さんは会場探しに奔走した。新型コロナの影響で、当初の予定より1年ずれる形にはなったが、最終的に兵庫県立美術館のギャラリー棟という大舞台での開催が決まった。あとは、このまま準備をしていだけ……そのはずだった。しかし、開催日をおよそ半年後に控えた2021年1月、アトリエに舛次さんの訃報が知らされた。

「それまでアトリエで元気を振っていたので。……ほんとうに急でした」

本人不在のまま開催の準備は進められ、6月末に舛次さんの「静かなまなざし」と富塚さんの「かたりの記憶」はW個展という形で同時開催された。展覧会に来た富塚さんは、本当にうれしそうに舛次さんの絵を見ていたそうだ。

## 海外に散逸してしまわぬように

舛次さんがこれまでに描いた絵画は約500点。展覧会では時系列順に約100点が展示された。広い空間に作品が並ぶ様子は圧巻だ。初期に描いた甲子園球場の絵と、中期以降の大胆な構図と豊かな色使いで描かれた絵を見比べると、後者は明らかに「作品」になっている。改めて舛次さんの才能を見出した、はたさんの直感に驚かされる。彼にできないモチーフの切り取られ方がされていて、タイトルを見て何が描かれているのかを理解することもしばしば。だからこそ見ていて飽きないし、見るほどに絵の世界に引き込まれてしまう。

生前から舛次さんの絵を買いたいという声はあり、特にスイスのローザンヌ美術館に収蔵されて以来、多くの注目を集めてきた。しかし、数年前から舛次さんの絵の販売はやめているという。理由は絵を散逸から守るためだ。国内ならともかく、海外に作品が売れると、一堂に集めて展覧会を開催するこ

とが困難になる。「舛次さんの絵は海外からの問い合わせも多いんです。絵が世界中に散らばってしまうと、作品が日本に残らなくなってしまいかもれない。『売ってほしい』という声もありますが、今は販売は止めています。今回の展覧会も、保管していたおかげで開催できました」と三栖さんは話す。

1「舛次崇 静かなまなざし」の展示風景。多くの人が足を止めじっくりと作品を鑑賞していた。2力強く塗ったパステルの粉にフーツと息を吹きかけて飛ばす舛次さん。手の側面はパステルで真っ黒。3展覧会のきっかけを作った仲間である富塚さんの作品。4会場では、舛次さんの貴重な制作風景を収めた映像が流れていた。5 ボーダレス・アートミュージアム NO-MA (滋賀県)で開催された企画展「ボーダレスの証明 はたよしこという衝動」(2021年6月5日～8月29日)6 NO-MAでの展示。舛次さんの作品が右手に見える。





7

## シュウちゃんはものづくりの師匠

「絵のバランスに惹かれました。シュウちゃんの絵は、部屋やリビングなど空間になじむ」。店に飾られた舂次さんの絵を眺めるのは、丹波篠山市（兵庫県）で木工と暮らしの店『6rock（ロク）』を営む荒西浩人さん。舂次さんのことを親しみを込めてシュウちゃんと呼ぶ。荒西さんは16年ほど前に〈あとりえずかけ〉でボランティアをしていてシュウちゃんに接しているうちに、彼の才能に大きな刺激を受けた。この絵はその頃に購入した絵だという。当時、購入希望者はそれほどおらず、展覧会に来た人や、身近な人には販売することがあったそうだ。荒西さんはボランティアをしていたときの話を懐かしそうに話してくれた。

「シュウちゃんは紙をじっくり見つめながら、穏やかに絵を描いていました。僕が話しかけると、にこっと笑い返してくれて。……いつも笑顔で難しい顔をしていることはほとんどなかったですね。現在家具職人として活動する荒西さんにとって、舂次さんは「ものづくりの師匠」でもあるという。「シュウちゃんや作品に触れるなかで、自分の思いのままに自由なものづくりをしていいんだって教えてもらいました。僕のものづくりに対する初心を思い出させてくれる存在でした」



8

## 周りにいる人たちのもの

兵庫県立美術館での展示にも荒西さんの手による額があった。「師匠」と「弟子」の共演だ。会場から出ようとしたとき、偶然にも舂次さんの母親の和子さんと叔母のつや子さんに会うことができた。「崇は私の父の影響で、小さい頃から野球を見ていたんですよ。阪神タイガースのファンで甲子園球場の試合をよく観に行っていました。試合が終わる、照明が消えても崇は帰ろうとしないんです。『出て行ってくださいー!』と、球団スタッフに言われるまで動かない」と、やさしい笑顔浮かべて和子さんは思い出を話

してくれた。迷子になった話、相撲中継を見るのが好きだった話、新聞紙で甲子園を夢中で作っていた話。……あふれるエピソードからはアトリエにいるときはまた違う、家族に愛されながら穏やかな日々を送っていた舂次さんの姿が見えた。そこに三栖さんも加わり、舂次さんの思い出話にいつか花が咲く。みんなの心の中に舂次さんは生きている。改めて思う。この展覧会は多くの人の協力によって開催されたが、それは作家本人のためであると同時に周りにいる人たちのためのものでもあったのだ。

7『6(rock)』の空間に馴染んでいる舂次さんの作品。  
8「ひと目見て、この作品に惚れました」と、荒西さん。  
9 展覧会では植木鉢を描き始めた頃の舂次さんの作品をはじめ、生前に描かれたものうち100点が展示された。10 何かを思い巡らせるように、じっと舂次さんの写真を見つめる富塚さん。11〈あとりえずかけ〉の三栖さん（左）と舂次さんの母親である和子さん（右）。ふたりとも作品をプリントしたTシャツがよく似合っている。  
※2と10の写真は〈あとりえずかけ〉提供

〈あとりえずかけ〉  
兵庫県西宮市馬場町4-17  
電話：0798-31-1043  
<https://www.ichiyou-kai.or.jp/art/>



9

## 舂次さんの作品を守るために

舂次さんが新たに絵を描くことはもうない。けれども〈あとりえずかけ〉には500点もの作品が残っている。そのことについて三栖さんはどう考えているのだろうか。「このまま〈あとりえずかけ〉に置いているのが正しいとは思っていません。ですが、個人の手に移ると散逸する可能性があります。それを避けるためにも国立や県立の美術館に収蔵してもらいたいと考えています。海外から展覧会の依頼があった際も、美術館ならスムーズに貸し出すことができるでしょう。いつか舂次さんの作品を研究したいという人が現れたときのためにも、できるだけまとめて保管しておきたいと思っています。作品を一番いい形で守りたい。その思いを胸に三栖さんたちの新たな伴走が始まろうとしている。



10

11





ともにかける  
~ARTの伴走者~  
02

Place:  
たんぽぽの家  
アートセンター HANA

サポートスタッフ

宿利真希さん



# 本人は手を動かさない プロデューサー型アーティストの 腕となり、声となる。

アトリエの大きなテーブルでニコニコしながら椅子に座っている女性がいる。隣のスタッフは段ボールを慣れた手つきで切り抜いている。

ここは奈良市にある〈たんぽぽの家 アートセンター HANA〉。女性は宿利真希さん。2008年よりここを利用し、創作活動を続けるアーティストだ。好きな漢字やキャラクターなどを、立体作品のようなインパクトで、かつユーモラスな味わいのある切り絵で制作し、これまでに数多くのグループ展などに参加している。そんな彼女の最大の特徴は、プロデューサー型であるということ。つまり彼女がプロデューサーとなりスタッフに指示を出し、制作が進んでいく。

「真希ちゃんは自分で着彩はするけど絵は描かないです」と話すのはアトリエプログラム担当の吉永朋希さん。「彼女は創作意欲があってアイデアも

明確。だけど着彩以外はプロデューサーのように指示を出すだけ。スタッフは言われたとおりに絵を描いたり、切り抜いたり。でも真希ちゃんの判定は厳しくて、かなりの割合でボツにされますね。ボツの場合は、すーっと横に避けられます(笑)。制作はその繰り返しですね。」

制作風景を眺めていると、宿利さんは指示を受けて作業するスタッフや身近な人に、同じ言葉やポーズを何度も投げかけてコミュニケーションを取っていることが分かる。例えば、この日は制作途中の作品を指しながら、「えださ〜ん」や「かんぺいちゃん」をリクエスト。その繰り返しで作業に心地良いリズムを与えているようでもある。これはプロデューサーの手腕か? とまかく独自のコミュニケーション手段を繰り出しながら、すーっと笑顔。アトリエではゴキゲンな時間を過ごしているようだ。

## 紆余曲折を経てプロデューサーに

障害ゆえにできないことをサポートする。下地を整えてこそ、個性が羽ばたいてゆく。そんな考えのもと〈たんぽぽの家 アートセンター HANA〉は宿利さんの制作サポートも「普段のケアの応用」として実践している。しかし「本人は手をほぼ動かさ



段ボールに描かれた木の枝を指しながら、スタッフにもおもしろい「えださ〜ん」をおねだり。

かんぺいちゃん



好きな芸人、間寛平さんが描かれた作品の、三角の目を物真似、「かんぺいちゃん」と言い合いながらスタッフと交流。いわば宿利さんのオリジナルの挨拶なのだ。

ない」というプロデューサー型に落ち着くまでは紆余曲折があった。というのも彼女のサポートは、画材を用意するなど通常の下地づくりだけでは取まらないものだからだ。スタッフは伴走者として制作にどこまで踏み込むのか? そんな悩みを抱えていたという。

「本人の意図とはいえ、実際に手を動かして絵を描くのはスタッフ。これで良いのかと4~5年間は迷っていました」と吉永さん。

試行錯誤の中、あえて「手伝わない」時期も数ヶ月はあり、指示されても「自分で描いて」と言っていたことも。しかし指示のままサポートしているうちに迷いは薄れていったようだ。

「きっかけは真希ちゃんに関わるスタッフみんなの絵や工作が上手になってきたことに気づいたこと。真希ちゃんがスタッフを育てているかのようで、

僕たちが楽しくなってきたんです。なにより、真希ちゃん自身も作品の精度が上がったことで楽しそうだった。自分で「私の作品」と呼ぶようにもなりました。そこで、この楽しさをネガティブに捉えてはいけなと考えるようになった。この楽しさこそ、ものをつくることの本質ではないのかも。真希ちゃんはプロデューサーとして、各スタッフの技術を分かった上で指示を出して、僕らを試しているようなところもある。そのことにも気づいた。それからですね」

加えて、2015年に宿利さんが参加したワークショップも決め手となった。彼女は初対面の小学生たちを前に、スタッフに指示したり、着彩したりと制作を公開。その様子をお手本に、小学生たちが作品をつくるという先生役をやり遂げた。

こうして宿利さんの制作方法を探ったことは、スタッフがアーティストと伴走することの意味を見つめ直すきっかけにもなった。

## 感性が通じる特別なつながり

「アートを仕事にすることは、表現の社会的な価値としてお金を得ることでもある。本人のためにそれが大切だと考えています。そのために僕らは作品をどう解釈して、どうやって広めていくのかを考える。真希ちゃんの制作に積極的に関わり、彼女の世界観をより知ったことで、自分たちスタッフはこ

れまで以上に問われている気持ちにもなりました」

取材中に「初めまして」と宿利さんの隣に座ってみると、すぐさま「これ切って」と音符が描かれた段ボールを渡された。おそろおそろカッターで切り抜こうとするけれど、厚い段ボールはなんとも切りづらい。苦戦する中、宿利さんはお気に入りの芸人・間寛平さんの特徴、三角の目の物真似をしてほしいらしく「かんぺいちゃん」と話しかけてくる。言われたとおり物真似しながら「かんぺいちゃん」と応えるというやり取りを何度も繰り返すと、その度に爆笑の宿利さん。下手な物真似でこれだけ笑ってくれるなら、そのオーダーにもっと応えたいようになってくるのが心情。これぞプロデューサー力か? とまかくこれまでの作品もこんなコミュニケーションを経てつくられていると想像すれば、より息づいて見えてきた。と同時にこの楽しさをどう広めるのかと問われる気持ちになるのもうなずける。

最後に、吉永さんはアーティストと伴走者の関係性について、こう話してくれた。

「どこまで踏み込むのかを考えた時期もありましたが、一緒にみくちちゃんになってこそ関係性が豊かになるし、普段入り込めない表現の領域に入り込むことができる。感性が通じることは尊いし、ただただ楽しい。そうした関係性はつくるもの。スタッフの個性を消すことなく、あえて深く飛び込んでいくようにしています」



〈たんぽぽの家〉  
奈良県奈良市六条西 3-25-4  
電話：0742-43-7055  
<https://tanpoponoye.org/>

1「えださ〜ん」が描かれた作品。最後の工程、着彩は宿利さんのお仕事。制作は1日3時間ほど。2「かんぺいちゃん」作品。髪型など細かい部分を丁寧に切り抜くのが難しい。が、スタッフはすでに熟練の域に。3 宿利さんの制作物を初めて「作品」として展示した「もじくん・ロゴシリーズ」。2017年奈良市のギャラリーにて(写真提供/たんぽぽの家)。「ナ」は「ホンマーカイナ、ソウカイナ」から、「イ」は「引越のサカイ」から、「火」は北海道のイオンの火曜市からというように、宿利さんの作品は明確なイメージと強いこだわりで制作される。4 アトリエプログラム担当の吉永朋希さんと挨拶を繰り返し交わしゴキゲンな宿利さん。5 スタッフの鶴島愛里さんいわく「真希ちゃんのおかげで、いろんな絵を描くのが上手くなりましたね。」







Place:  
はじまりの美術館

1 左から、館長の岡部兼芳さん、学芸員の大政愛さん、企画運営担当の小林竜也さん。2 4月17日～7月11日まで開催された「(た)よりあい、(た)よりあう。」では、全盲の美術鑑賞者、白鳥建二さんが館内につくった「けんじの部屋」に滞在。白鳥さんがいること、そこで起こることがアート。(撮影/澤木亮平) 3 来館者に好きな色で同じ図形を描いてもらいチラシを完成。4 以下10月24日まで開催の「やわらかくなってみる」出展作品。曾谷朝絵「鳴る色」。窓に貼ったカットティングシートや影の色が、時間と共に移り変わる。(撮影/はじまりの美術館)



# 来場者が自分ごととして感じる

福島県猪苗代町にある「はじまりの美術館」は、展示室に靴を脱いで上がり、裸足で鑑賞するスタイルからして、美術館の固定概念をとばらったユニークな美術館だ。企画展も毎回独自の視点がつらぬかれ、障害者の作品も、第一線で活躍する現代アーティストの作品もフラットで紹介している。

2021年4月から開催された企画展「(た)よりあい、(た)よりあう。」では、「頼る」ことをテーマに6組の作家を紹介。「頼る」という、とすると依存にもつながりかねないネガティブなイメージもあるが、そこに込められた思いはいったい何なのだろう？

「当初、東日本大震災10周年を意識して“自立”というキーワードが浮かんだのですが、私自身40年近く生きてきて、自分一人でできることなんてたかが知れている。むしろ、いろんな人やモノ、もっといえば思い出なんかに頼り頼られ生きているという実感があります。私たちは子どもの頃から“一人で何でもできるようになりなさい”と自立を促されて育ちましたが、そもそも自立というのは、さまざまなものが寄り合い、支え合っている状態ではないかと思うんです」と企画した小林竜也さんは言う。「た」がカッコで括られているのは、「よりあい、よりあう」というふうにも読んでもらいたかっ

たからだそう。そもそも美術館ができる以前から、地元の人たちとの“よりあい”という活動を通して、美術館をどのように活用していくか、地域をどう盛り上げていくかを話し合ってきたという。震災から10年が経ち、「地域の復興」という言葉をよく耳にするが、“復興”も地域を元に戻すことではなく、さまざまなものに頼って新たな関係性を結び直していくことではないかと小林さんは言う。

「展覧会では、絵画、ドローイング、漆器、映像、プロジェクトなど、さまざまな表現や取り組みを紹介しましたが、多様な“頼る”“頼り合う”に触れることで、頼ることをポジティブにとらえ、新しい関係性を作ることのきっかけになればいい。美術館では作品を紹介していますが、作品をとっかかりに自分の生き方や考え方を直視すきっかけになればいいと思っています。ここに来てくれた人が自分ごととして考え、何かを表現したいと思ったり、普段自分がやっていることも実は表現なのではないかと気づいたり、こう考えてみたら違う捉え方ができるんじゃないかと新しい視点を獲得したり。何か新しいことがはじまっていくきっかけになれば。それが美術館の名前“はじまり”に込められた思いですから」と小林さん。

## 主体はあくまで「見る側」にある

現在開催中の企画展「やわらかくなってみる」も、これまでタイトルからおもしろい。

「コロナ禍の今、閉塞感やプレッシャーを感じて毎日を暮らしている方も多いかと思います。そんなときに必要なのは、やわらかな強さなのではないかと思うんです。やわらかくなるというと、一見弱く負けることのように見えるかもしれないけれど、しなやかさだったり、柔軟に変化していくことだったり。この展覧会が凝り固まった思考をときほくしたり、ふと息抜きをしたりするためのヒントになって、そのことが日々を生き抜くやわらかな強さにつながれば。見た人の心も体もやわらかくなればという視点で作家を選びました」と学芸員の大政愛さん。作品からやわらかさを感じたり、体験することができる7組の作家の作品を紹介しているが、「やわらかくなる」主体は、あくまで見る側のほうにある。

セロハンテープの造形を見て、これはいったい何なのかと考えさせられたり、窓にカットティングシートを貼った作品の影の色が時間と共に変化していく様を見て、その影の中に自分も入り込んでみたかったり。カラフルなフェルトペンで「きがいつぼん」



# 表現の場をつくるということ。

とか「ぶんばぼーん」とひと言ずつ書かれたカードを見ると、声に出して読んでみたくなったり、ライトで空中に線を描くことでアニメーションを作り出す映像作品を見ていると、光に合わせて体を動かしたくなったり。作品を見ていくうちに、こちらの頭の中が引き回され、どンドンぐにやぐにやわらかくなっていく感覚がある。作品選びや展示の仕方のポイントはあるのだろうか？

「自分たちが見て、単純におもしろいとか、すごいなと思って、それを誰かと共有したいという気持ちベースで作品を選んでいきます」と大政さん。そこにあるのは、この作品を、作家を紹介したいという熱い思い。「企画展の中では、体験ができる作品を展示することも多いです。実際に手を動かしてなにかを体験し、刺激を受け、その刺激を自宅に持ち帰っていただくという構成にしています」

今回は、新聞紙とガムテープで巨大な造形を作るアーティスト、関口光太郎さんの展示室に工作コーナーが設けられ、実際に来場者が新聞とガムテープで作品をつくることできる。持ち帰ってもいいし、関口さんの作品の一部として置いていくこともできるという。

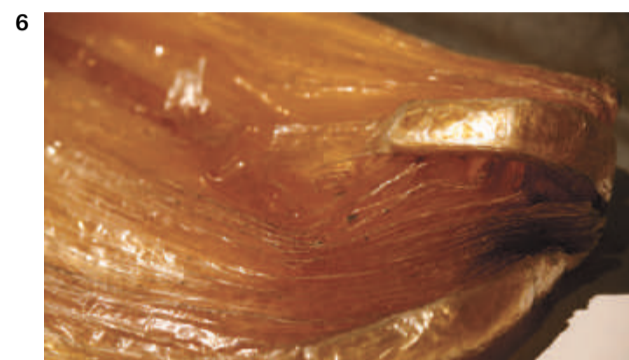
## アートはいつでも誰でも始められる

「新聞紙とガムテープという身近で慣れ親しんだ材料だからこそ、やってみよう、自分にもできるかもしれないと思えます。アートは堅苦しいものではなく、いつでも誰でも始められる。他人事ではなく自分も表現する主体なんだということを感じてもらえる場になればいいと思っています」と大政さん。

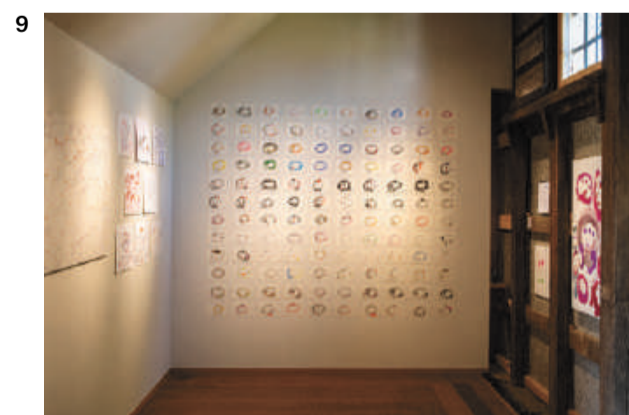
アートという、特別なもの、自分たちとは違うものという見方をしてしまいがち。とかく「あー、すごいね」で終わってしまいがちだ。

「すごいと思ったとき、遠ざかってしまうのはもったいない。“障害のある人だからすごい”“アーティストだからすごい”と遠ざかっていくのではなく、この場所で出会ったことから、なにかがはじまればいいと思います」

〈はじまりの美術館〉  
福島県耶麻郡猪苗代町新町4873  
電話：0242-62-3454  
<https://hajimari-ac.com/>

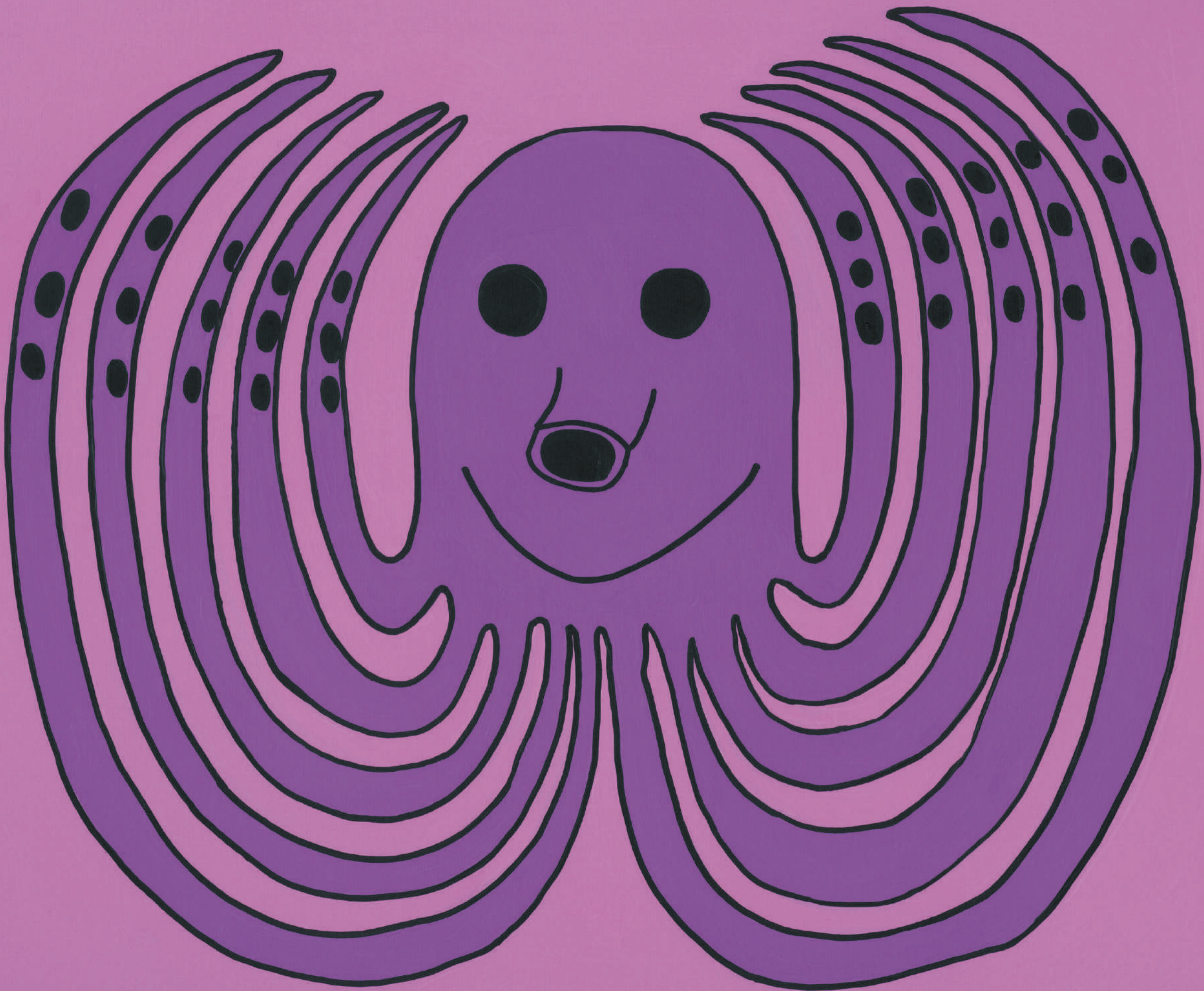


文・和田紀子 写真・大沼ショージ



5 中村真由美の油絵「サルの子」。6 ニチパンのセロハンテープで制作する梅木鉄平の「テープの造形」。7 清水ちはるの「心のままに」。8 関口光太郎の「王様2020Remix(soft type)」。9 岩崎由美「無題」。





中村真由美「タ」/アクリル、顔料マーカー、  
キャンバス、318×410mm、2014年





中村真由美 / NAKAMURA Mayumi

1 文・中村悠介 写真・森本菜穂子



2



3

1 怒涛の制作を終え一息つく中村さん。2「シベリアトラ」／キャンバス・油彩／727×606mm／2017年 3 動物絵画は写真を、イラストは頭の中のイメージを忠実に描く。結果、作風の振れ幅につながる。

\*表紙、P12-13にも作品を掲載



4 自宅では小学2年から絵日記を続けている。雨の日は「ザーザー」など文字で埋め尽くされることも。5 アトリエでの創作時間以外の作業でもイラストを描く。6.7 新聞紙を糊で固め成形した張り子をじっくりと色付けしていく。



7



5



6

### 唯一無二の作風と振れ幅、創作の衝動が止まらない

点描のような繊細な動物絵画から、二次元から飛び出てきたばかりのような張り子まで。同じ作者とは思えないスタイルの違いはいったい？ 中村真由美さんは奈良〈たんぼの家 アートセンター HANA〉きつての人気アーティストだ。アトリエプログラム担当の吉永朋希さんいわく「おちゃめでアイドル的な存在。そして誰にも左右されることのない作品」の制作に日々猛烈な勢いで取り組んでいる。

色付けなど手を休めない制作の最中は常に「♪おまつりにんじゃ〜」など、鼻歌を高速で口ずさんでいるけれど、それは集中を保つため、自分の世界観に入り込む彼女流の技法にも見える。2004年に油絵画から創作活動をスタートさせ、近年は張り子がメイン。これまで制作した張り子は250体はくだらないそうだ。吉永さんは言う。「真由美ちゃんは制作に根を詰め過ぎることもあるんです。制作を止められない性分。だから僕らスタッフは、次はこれを作ろう、と別の素材を提案して気分を変えてもらおうこともしばしば。こうしてモチーフを変えることで、いろんな作品が生まれていきます」。緻密な完成度、そして“かわいい”の迫りもすでに唯一無二。だけど、止まらない創作の衝動あり。アートの可能性が彼女にまだまだ潜んでいる。

1 まるで作品のような舂次さんの道具箱。2「イスと消火器とピンとほうき」1594×750mm／パステル・キャンバス／2007年 3 自作の前でくつろぐ舂次さん。4「きりん3」パステル・水彩紙／545×790mm／2009年 5「六甲おろしの甲子園」水彩紙・パステル／498×648mm／1993年頃 6 多くの人が時間をかけて舂次さんの作品を鑑賞していた。

※3と4の写真は〈あとりえずかけ〉提供



1



2



3



4



5

### 大胆な形と色から伝わる力強さとやさしさ

植木鉢やハンガーなどの日用品が大胆な構図で描かれている。タイトルがなければ何かわからないかもしれない。しかし「これ以外はない」と思わせる色と構図で、見る者は思わず絵に惹きつけられてしまう。〈あとりえずかけ〉(兵庫県)のメンバー・舂次 崇さんの作品には、そんな力強さとやさしさを併せ持った魅力が宿っている。「モチーフは提案することが多いですが、使う色は舂次さんが決めていました。出来上がるとコンコン、トントンと机を叩いて合図を送ってくれて」と、スタッフの三栖香織さんは懐かしそうに話す。言葉が過去形であるのには理由がある。2021年1月に46歳の若さで急逝したのだ。18歳のときから30年近く絵を描き続け、死の直前まで元気な姿を見せていたのに。〈あとりえずかけ〉に通い始めたばかりの頃は甲子園球場のスコアボードを好んで描いていたが、2年ほど経ったある日から植木鉢などの身の回りにあるものを描くようになり、それをきっかけに舂次さんの絵はますます自由ののびのびとした表現になっていった。生涯で描いた絵の数は500枚以上。舂次さんの絵はこれからも見る者をやさしい世界へと連れていく。

文・坪根育美 写真・齊藤有美

### 舂次 崇 / SHUJI Takashi

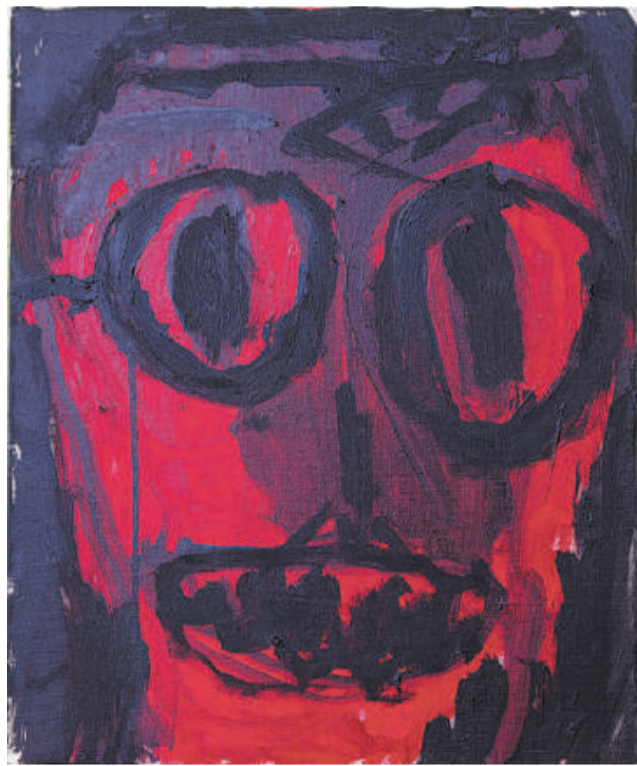


6





1



2



4

1「子猫」／油彩、キャンバス／410×318mm／2017年 2「岩男さん」／油彩、キャンバス／455×380mm／2020年 3取材時の最新作は100号キャンバスに描かれた「イナズマン・フラッシュ!」／油彩、キャンバス／1620×1303mm／2021年 4重ねられた絵の具が固まって小山を成す、画伯のパレット。5大好きな悪役プロレスラー、アブドラー・ザ・ブッチャーさながらに。



3

川上建次 / KAWAKAMI Kenji

### 100号の特大キャンバスからあふれ出す爆発的な笑い声、描く喜び

文・小野好美 写真・浅田政志

「やっぱり赤ですか」。川上建次さんの絵画制作をサポートする三重県松阪市の〈希望の園〉施設長、村林真哉さんが訊く。筆に絵の具をつけ、川上さんに手渡す。川上さんはとにかく「赤色」なのだ。小学校高学年を最後に学校には行かず、長く自宅を絵を描いて過ごしてきた川上さんが〈希望の園〉に通い始めたのは43歳のとき。そこで出会った油絵がフィットした。げらげら笑いながら描いていく。絵の具が、キャンバスにべちょとつく。それだけで大笑いだった。モチーフは戦隊もの、好きなレコードのジャケット、友人、思い出。過去と現在がひとつの作品のなかで組み合わさることもある。

「完成形がどうなるかではなく、どれだけ絵の具をびしゃびしゃやれるか。描くということ自体が重要なんだと思います」と村林さんは話す。国内外の展覧会への出展、多数の受賞実績、そして何より楽しそうに描く川上さんの様子から、園には「川上さんのように油絵をやりたい」と憧れて創作を始める「川上チルドレン」も多い。あるときから川上さんはそれまでのように体を動かさなくなった。筆は軽くて細いものに変わったが、絵の生命力は変わらない。100号キャンバスの最新作がそのことを物語っている。



5



1

### TV ニュースの時事ネタに、フルボリュームで流れるジャズと動物たちが入り込む

文・小野好美 写真・浅田政志

プーチン大統領に厚生労働大臣、ワクチン接種。時事ネタを報じるTVの世界に、大好きなジャズや動物。唯一無二のドリーミーな世界を描き出す前野一慶さんは弱冠19歳。13歳のときから三重県の〈希望の園〉が週末に開くアトリエに通ううち、園の「画伯」こと川上建次さんに憧れを抱いた。「僕も川上さんのように大きなキャンバスで油絵をやりたい」。当時は油性ペンを使っていたが、家族や職員と相談し、もう少し大人になったら油絵を始めることに決まった。

2019年、ついに油彩デビューのときが来た。東京の美術館である展覧会を見た前野さんは、気に入った絵のポストカードを買い求めるも、その作品は商品化されていなかった。「それなら自分で描こう」と生まれたのが油彩一作目「おサルと僕の絵」だ。アトリエで前野さんはするすると絵筆を動かし、ときにレコードの音楽に合わせて踊る。前野さんは言う。「小さい音量じゃだめ」「音楽があるから描ける」「音楽があったら何もいらんよ」。作品が、生活が、愛する音楽と分かちがたく結びついているのだ。パラレルワールドのひとつでは、大統領もジャズ奏者もレッサーバンドも、前野さんと一緒に踊っている。



4

前野一慶 / MAENO Ikkei



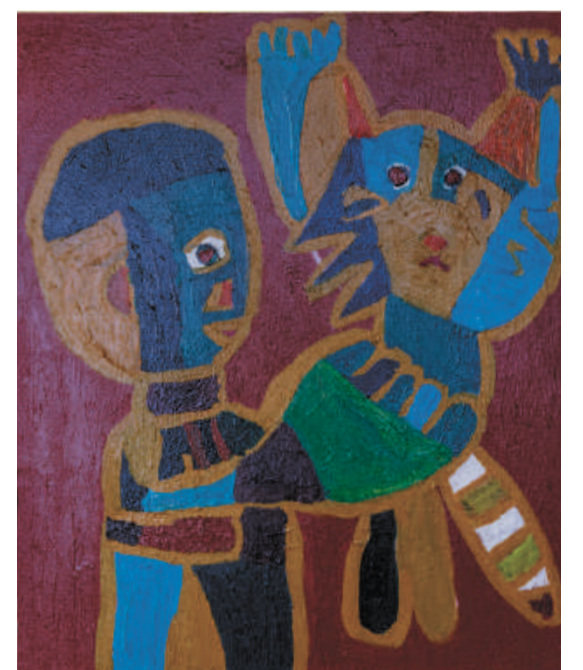
2



3



5



6

1人が好き。その笑顔を見た相手もまた、前野さんを好きになる。2輪郭を取り、上から下、下から上へ塗っていく。3お気に入りレコード7選。西ドイツの60年代ジャズがフェイバリット。4「コロナ収束を祝いパーティをするサックス奏者とダンサー」／910×727mm／油彩、キャンバス／2021年 5「おサルと僕の絵」／606×500mm／油彩、キャンバス／2019年 6「レッサーバンドと遊ぶプーチン大統領」／606×500mm／油彩、キャンバス／2020年



# INTERVIEW



## 1 / 村本大輔 MURAMOTO Daisuke

お笑い芸人

### PROFILE

1980年生まれ。福井県おおい町出身。2008年に中川バラダイスとお笑いコンビ「ウーマンラッシュアワー」を結成。原発や沖縄基地問題、朝鮮学校など政治・社会問題を取り上げた漫才を行う。著書に『おれは無関心なあなたを傷つけた』（ダイヤモンド社）など。

※「点字ブロックを踏まないように気をつけてね」という村本さんの心配りとともに撮影しました。

# 全員が表現者。あなたにだって泣いている夜はあるでしょう。それを共有しようぜと思う。

文・岡田カーヤ 写真・衛藤キヨコ

出身地である福井県おおい町の原発のこと、沖縄の基地問題や朝鮮学校のことなど、お笑いの表舞台上で扱われることが少ないネタを、ときに熱く、ときに洒脱に繰り出し、怒りや悲しみさえも笑いに変える。テレビに出続けることではなく、自分の道を進むことを選んだ村本大輔さんにとって、表現するってどういうことなんだろう。

——コンビでの緊迫感ある漫才と異なり、ソロの独演会はリラックスしたムード。村本さんが好きだというスタンドアップコメディはこうした雰囲気なのかと想像しました。

アメリカに行くと、よくバーに行くんです。そこには舞台があって、500円くらい払うと素人がお笑いをやったり、歌をうたったり、ポエムをつけて発表したりするんです。M-1で優勝したいとか、プロになりたいとか、金稼ぎたいという人ばかりではなくて、買い物袋をもって主婦が夫の悪口をマシンガンのようにまくしたてたりと、自分の言いたいことだけを言う。自分の意見を言う。すごく健全な場だと感じています。

——スタンドアップコメディは、社会へのカウンターパンチともおっしゃっていますね。

社会ってなにも政府や政治のことだけじゃない。吉本に軽度の脳性麻痺の鈴木ちえという芸人がいるんですけど、そいつが足を引きずって歩いていると、よく「かわいそう、代わるものなら代わってあげたい」とおばちゃんに声をかけられるらしいんです。でも、本人は「そもそも、おまえとは代わりたくない」と思っている（笑）。

彼女からしたら、それも社会へのカウンターパンチなわけですよ。障害者はかわいそうという前提でとらえる社会に対する。それは社会の一員である自分たちに向けられるものでもある。

人は、自分たちを強いものと弱いものにわけて、あの表現はいい、これはダメと決めつけがちだけど、表現ってある程度差別的であっていいと思うんですよ。もっと、どろどろしていたっていい。

あるとき、知り合いの在日朝鮮人のおばちゃんに連れて行かれて、朝鮮学校へ行っただけです。独演会をしてもらっていわれて。そのとき、朝鮮人の前では「あのおばちゃんに強制連行された」って言って、日本人の前では「拉致された」って言い換えるのとよりウケた。これもカウンターパンチですよ。お互いすっきりする場所が違うんです。そんな世界が無数に存在します。

——差別は違いを馬鹿にする。でも、お笑いは違うことを笑いにしてもおっしゃっています。

違いは楽しいですからね。アメリカにおいての黒人たちのお笑いの強さって、違いというものをしっかりと笑いにしているわけです。どうして黒いバンドエイドはないんだ、それって俺たちは怪我しちゃいけないのだから。

日本における在日朝鮮人のことを、俺はうらやましいと思うときがあるんです。在日朝鮮人の人は、

自分たちの境遇とかルーツを持ち続けようと、今も勉強をしている。関東大震災で行われた虐殺なんかが歴史のなかに埋もれていく中で、いまだに怒っている人もいます。それがすごく興味深くて、この一生懸命怒っている人は自分となりが違うのか、同じなのかを一生懸命考えるんです。こうした違いは在日の人だけにあっていいし、在日の中でもいろいろな違いがある。そもそも在日として分ける必要もないかもしれない。でも、その違いはそこにあって、笑いに変えられるからこそ、俺はやっぱうらやましいと思う。

だから、俺はアメリカに行って、自分が「違う」存在になることを味わいつくそうと考えています。

——なるほど、アメリカでは村本さん自身が「日本人」というマイノリティになる。近々、活動の場をアメリカに移し、スタンドアップコメディで笑いをとるという決意は堅いんですね。

はい、絶対に行きます。今の俺がアメリカに行ったら、なに言っているかわからない状況が続くでしょうから、海に潜ったアメリカ人のほうがよっぽど通じると思っていますね。それがちょっと楽しみでもあります。ここから始めてやるみたいですね。

——英語は中学生レベルだけれども勉強をしながら、英語でネタもつくっているそうですね。ネタの内容は日本でやるときと変わりますか？

違います。誰に聞かせるかによって前提が変わってきますから。前提を理解しているか説明が少なくてすむ。そうでないと説明が多くなるんです。

俺、日本では在日朝鮮人をネタにしているんですけど、在日朝鮮人という日本人でもびんと来ない人が多い。たとえば、菅さんや安倍さんのことなら前提を理解しているけど、在日朝鮮人は教科書の中のことじゃなくて、よくわからないという人が多い。そういう前提のなか、自分の出会った在日朝鮮人の話をして、笑いにできたとき、すごく達成感がある。

すると、在日朝鮮人のなかでその話が美化されて、朝鮮学校に行く「私たちのためにありがとう」と言われることが多いのですが、俺は在日朝鮮人全員の話をしているわけではない。自分が出会った「この人」がおもしろかったから、その人から聞いた話をネタにする。だって好きな人のことって、好きな食べ物でも映画でも、いろいろ気になるじゃないですか。政治家や大きな組織の人は、立場でものを言うけれども、俺は個人でしかないし、個人の話には興味がない。

——その人を好きになったからこそ、笑いに変えられる。

そうなんです。おもしろい話があって。いろいろな人の話を聞きたいから、よく初対面の人たちと話すんですよ。この間も6人くらいの人と話をしていたら、「僕、実家が熱海で被災して」と言う人がいた。隣の人は「僕も福島浪江町出身で」

と震災10年後の現状を、その次の人は「末期がんで、抗がん剤を飲んでいて」という話をしてくれた。そしたらその次の人は、「私の友達バイト先の店長の妹さんが、がん……、みたいな……?」と、無理やり話題をひねりだそうとした（笑）。いやいや、いいですよ。カードゲームのように必死に探して出したら、「あ、このカード弱かった」ということをしなくても。

——ネタ探しになってしまった。

自分個人というものをもっと大事にしたいと俺は思います。その人にだって、なにか物語が絶対にあるはずなんです。がんと被災とか大きなキャッチフレーズに振り回される必要はない。その人にはその人の大きななにかがある。俺はそういうことをもっと聞きたい。

この国では、被ばくとかLGBTQとかのことは大きな声で語る人が多い。でも、それ以外の人が「そんなカードを自分はもっていない」「自分には語ることはなにもない」と思う必要はなく、「あなたにだって泣いている夜はあるでしょう」という話ですよ。それを共有しようぜと思う。

——なるほど。すると、みんなが表現者となる。

そう。全員が表現者だと俺は思っている。全員が思っていることを発信したらいい。お笑いできるやつはお笑いやって、歌えるやつは歌う。子どものために料理をつくるのも立派な表現だと思う。

ユーモアの装置だって、全員にちゃんと備わっていて、みんな誰かを笑わすことができる。でも、その装置をずっと放置しているから、さびついて、お笑い芸人を頼ることになっている。友達同士で、ワイン片手にこれはどう思う？ あれはどう？ という会話をもっとすればいい。全員がこう思う、ああ思うと言える世の中になれば、楽しい表現者が増えていくと思います。

社会を変えようとするのは素晴らしいけど、なかなか社会は変わらない。でも、俺たち一人ひとりがこの社会とつながっていることはたしかなこと。だったら同時進行で、この生きづらさのある世の中を自分たちでどうやって楽しんで生きるか。俺はそれを社会のありかたとして提示していきたい。そんなことを思いますね。



北海道から沖縄まで、全国で定期的に独演会を開催している。告知はインスタグラムなどSNSで。

<https://www.instagram.com/muramotodaisuke1125/>



# 色に優劣はない。ただ色が違うだけ。その色が好きと選択をするのは自分次第ではないでしょうか。

カラフルな衣装に身を包んだ僧侶の西村宏堂さん。西村さんはLGBTQ当事者でメイクアップアーティストという顔も持つ。生き方がユニークで、衣装だけでなく人生そのものが色彩豊かだ。自身の性や人生に迷う人に寄り添い、優しいメッセージをそっと投げかける。そんな西村さんに共感する人は多い。西村さんのカラフルな色は人をどこに導くのか。西村さんにお話を伺った。

——性の多様性が世界中で理解されはじめているのに、男女以外の性を認めない人たちもいます。

理解をしないのが自分にとって「得」だからではないでしょうか。人をカテゴリーに入れて支配すれば簡単だし、深く考えなくてすむ。LGBTQは数が少ないので、排除をするのは簡単だったでしょう。……たとえば、学生時代、いくら聞いてもわからない授業がありませんでしたか？それと同じように人が多様であることを理解できない人もいます。でも人は多様であることと知ること、私は「得」なことだと思えます。人間が生きていく上で、人と異なる部分は誰にもあると思います。ですから自分と違う相手に対して「こうあるべき」と、言い続けていると、自分もその考え方に縛られます。だけど、そんなことを言わなければ、心は解放されると思うんですね。「人は誰もみんな違うんだ」。そう思えばその人は柔軟で寛容になれるし、人に優しくなれるのではないのでしょうか。

これまでは差別を考えると、深刻な問題にフォーカスされることが多かったと思います。だけど、性的少数者であるLGBTQに興味のない人からすれば、そんな話は拒絶反応の対象になるかもしれません。例えば、よその国について、その国の文化や芸術に触れると、多くの人が親近感を持ちます。私はアートやエンターテインメントといった楽しいものでLGBTQを伝えたい。私は同性愛者としての体験談をメイクやファッションを介して発信することで多くの人に楽しみながら理解を深めてもらいたいと思います。

——そんなつもりはなくても、言葉や態度で人を傷つけてしまうことがあります。西村さんは言葉や態度で気をつけていることはありますか。

私は「みんな」や「普通」という人を括る言葉や「この国の人はこうだ」「女性（男性）らしい」などの差別的な表現をしないように気をつけています。大きなカテゴリーに入れるのではなく、「私が会ったあの人はこう」と、具体的に表現すれば全部じゃなくなりますよね。他人のことを完全に理解することはできないので、常に相手を尊重する姿勢であることが大切だと思います。

——西村さんからお話を伺っていると、寛容さが伝わってきます。しかし、そういう心を持つことは難しいのではないのでしょうか。

私だって怒ることはありますよ！以前、ある人に「同性愛はホルモンの異常である」と、完全に医学的に不正確なことを言われました。その時は心の

底から怒りがこみ上げました。イライラすると気分も落ち込むし、体にまで悪い変化が出てしまいます。そして調子の良かったアトビーも再び悪くなってしまいました。ふと、こんなに怒り続けていたら、怒りに飲み込まれて、私の人生が邪魔されてしまうと感じたんです。よく考えてみたら、その人に正しい知識がなかっただけです。言われたことを正面から受け止める必要はなかったんですね。その後、実は差別発言をした本人自身が幸せじゃなかった、だからその怒りを私にぶつけていたんだということに気づいたら怒りも収まりました。「戦い」に参加しないことが自分にとって一番得なのだなって思っただけです。

——明らかな間違えていることを言っている人に対しては、関わらない方がいいですか？

いえ。放っておかない方がいい。間違っていると伝えることは大事です。私はそんなとき、丁寧に「それは間違っています」と伝えます。ですが、無知さに対して怒りを示すよりも、私は楽しい方法で啓発活動が続けたいですね。差別的な人は、どの時代にも、どの地域にもいます。……諦めるのもありかもしれないけれど、私は立ち上がって声を上げていくことを選択します。それが私のやりがいになるし。喜んでくれる人がいるのであれば、それは私の喜びでもあるのです。

——日本では同性婚を認めていません。西村さんは結婚という制度についてどうお考えなのでしょう。

望むのであれば、誰でも結婚できることが平等な社会だと思います。それぞれの時代や国の状況によって、人の自由や生活の豊かさが左右されてしまうのは残念なことです。

個人として思うのは、愛し合っているなら結婚という制度は別に必要ないんじゃないかと思えます。結婚するのは動物の中で人間だけです（笑）。逆に「結婚しなきゃ！」というプレッシャーが生まれるのであれば、面倒なことだとも思えます。ただ、今は日本で同性婚ができない理由がちゃんと説明されていないのではないのでしょうか。同性婚を反対する人の正直な気持ちや、その理由をしっかりと問うべきだと思います。ですので、国のルールを作る人たちを選ぶ選挙はとても大切だと思います。

——自分自身を好きになれないという声を聞くことがあります。そういう人に対して、西村さんはどのようなアドバイスをしますか。

まず自分自身を好きになれないことで、「なにを得ているのか」を考えるといいと思います。なぜかという、好き・嫌いを選択だと思うんですね。人間って良いところも悪いところもあるでしょう。そして、できることもできないこともある。自信があるように見える人でも、全てが完璧かというそうではない。逆に自分のことが嫌いな人でも、全部がダメなわけではない。つまり、自分自身が好きとか嫌いとかを選択しているんです。もしかすると、自分のことが「好きじゃない」と言うことで、注目をし

文・井上英樹 写真・高橋宗正 スタ일리スト・清水文太 衣装・KANSAI YAMAMOTO 問い合わせ先・株式会社山本寛齋事務所 (info@kansai-inc.co.jp) シューズ・本人私物

てもらって「愛してほしい」と思っているのかもしれない。もしくは人に妬まれないようにしているのかもしれないですね。

以前、私も自分のことが好きじゃなかったんです。それどころか、同性愛者である自分のことを正当化するために周りの人を嫌っていました。つまり、「他の人もおかしい」と思うことで、自分が差別されていることへの仕返しをしていたんです。でも他人の悪いところに目を配っていると、自分の悪いところにも目がいつてしまい、結局自分のことも嫌いになってしまいました。

それに気がついて、他人の良い面を褒め、愛するように切り替えました。そのように選択することによって、自分のことを好きになれることがわかったんです。「自分が嫌い」という人は、どうしてかなと、心の中に秘められた本当の理由を見つめて考えてみるとヒントが見つかるかなと思いますね。

——自分に聞いかけ、考える時間を持つ。西村さんからお話いただいた考え方を取り入れていくと、新しい自分の色や形が見えそうですか。

そうですね。色には優劣はありません。ただ違う色というだけです。その色が好きだと選択するのは自分次第です。成長するために自分をわざと嫌いになることもありますよね。「こんなじゃダメだ。もっと努力しなきゃ」っていうふうに。もしかすると、無意識にやっているかもしれないですね。「自分が好きとか嫌いと思うことは自分で選ぶこと。そして自分という色は、他の人と比べて優劣がつけられない」と気づいたとき、空が晴れたような気がしました。

……たとえば、なかなか人に言えないことで悩んでいる人もいます。私は信頼できる人を見つけて、話してみたい。そして、信頼できる人を増やしていくといいと思いますね。言えていないとき、最初は怖くて、暗闇に一步を踏み出すような感じがすると思うんです。それは私も経験したので本当によくわかります。でも、誰にも言えていない状態によって、成長が妨げられている気がしたんです。勇気を持って心を開いてみると、意外にも応援してくれる人がたくさんいた。存在しないと思っていた階段が、実は暗闇の中にも続いていて。だからこそ、私は想像もしていなかった未来にも歩いていかれるのだと思います。



『正々堂 私が好きな私で生きていいんだ』（サンマーク出版）他人とは違うユニークな自分に自信を持っていくと、背中を押してもらえ一冊。



## 2 / 西村宏堂 NISHIMURA Kodo

メイクアップアーティスト  
僧侶  
LGBTQ 活動家

PROFILE  
1989年東京生まれ。米バーソズ美術大学卒業、NYを拠点にメイクアップアーティストとして活動。ミス・ユニバース世界大会などでメイクを手がける。2015年に浄土宗の僧侶となる。LGBTQ活動家として国連やイェール大学などで講演。2022年に英語の著書『This Monk Wears Heels』を出版。



イッセー  
尾形の

# 妄ソ- 芸術鑑賞

縦横無尽な妄ソで、見ている人を独自の物語世界へ誘うイッセー尾形さんが、障害のある人たちのアート作品を鑑賞。自由に妄ソの翼を羽ばたかせました。そこからなにが生まれるか？ アートはもっと自由に楽しんでいいのです。

構成・岡田カーヤ 写真・浅田政志 ヘアメイク・久保マリ子 作品写真・木奥恵三 撮影協力・上野桜木旧平柳田中部



イッセー尾形流  
妄ソ- 芸術鑑賞 **術**

制作も妄想も、内、外、内、外の永久運動。  
行き止まりになることもあるけど、その姿も愛おしい。

この立体はどこかユーモラスな部分があって、存在感がありますね。きつと手が遊ぶようにしてつくったのだろうね。頭でつくるのではなく、手がつくっていく。だからなのか、生命力を感じます。

作品のつくられかたによって、妄想のありかたも変わってきます。つくり手はいつだって、つくったものに影響されて次をつくる。その連続ですよ。一度つくることで、自分の外のものになって、外になったものからまた影響をうけて、自分の中のものになり、つくることで外のものになる。内、外、内、外の永久運動のようなもの。

そんなときなにかの思いつきで、立体像の目の部分を全部線状にしちゃったことで、それ以上進まなくなるといことも起こるかもしれない。行き止まりになったから、また元の

パターンへと戻ることだって起こりうる。

そうしたことはよくあることでね。いいと思ってつくってはみたけど、行き止まりだったってことって、妄想でも、制作でもありがちなこと。

そこらからとえ引き返すことになったとしても、その行き止まりの姿には惹かれるよね。誰かに遮断させられたものじゃなくて、自らが遮断したら下唇まで出てきちゃったというような。「俺、出口がないんだ。どん詰まりなんだよ」みたいな感じで、どんどん愛おしくなってくる。明日の自分の姿のように。

最初は「侵略者」のようなよそよそしさだったのに、最終的には感情移入して「アイドル」的存在になった【写真3】。妄想をふくらましていくうちに、最初の見え方からどんどん変わっていく。今回はそんな体験をしました。

イッセー尾形 / Issey OGATA  
1952年、福岡県生まれ。1971年演劇活動を始める。一人芝居の舞台をはじめ映画、ドラマ、ラジオ、ナレーション、CMなど幅広く活動。高い評価を得ている。

## 『土着的置換』

かつて栄えた文明の遺跡から出土した4体の土像は、何を意味しているのか。侵略者、病原体、マスク、教祖、その説はどんどん変わり……。

中南米あたりの昔の文明がありますよね、アステカとか、インカとか。これらは、そこで考古学者が地層を掘っていたら出てきた土像です。どうやら時代的に、別の大陸からやってきた侵略者たちに襲われて、国が全滅してしまった悲劇を形としてとどめようと、当時の職人がつくったもののような。そのときに何が起こったかは、文字を持たない人たちだから記録はない。この像を読み解くしかないですね。

最初に出土したこれ【写真1】は、この土地にずっと住んでいた土着の人。次に出たこいつ【写真3】が鎧を着て攻めてきた侵略者という説を立てた。じゃあ、2体にはさまれた【写真2】はなにか。それを考えたとき、考古学者は説を変えたんです。俺の説は間違っていたと。【1】は人だけど、【2】は伝染

病であると、そう。これコロナなんです。

それならば【3】はなにか。これはマスク。何千年前にもそういう時代があったんです。じゃあ、そのあとどうやってコロナを克服したか、それこそを知りたい。でも、考古学者が探しても、探してもなにも出てこない。なのに、どうなったかという問い合わせがとくさんきたから、考古学者はもう一度【1】の像を持ち出した。「伝染病が広がり、マスクの時代もあったけれど、また元に戻れた」という説を捏造したんですね。

本当はもっと強力な伝染病【写真4】も見つけていたんです。そう、変異株ですね。でもこれは隠した。えらいことになってしまうから。そして葛藤が生まれたんですね。こんなことをして良かったのかと。

人々に希望を与えるために、俺はわざとこの説を出した。学者としては良からぬことをやったけど、人類のために希望を指し示したんだと。

土着の人たちは、侵略者に攻めいられて病気で全滅してしまったけれど、侵略者との混血は生き残った。国としてはなくなっても、人類として生き延びていけば生物学的にはいいじゃないかという考えもあるにはある。でも、命さえつなげば問題はないのか、それでも人間と言えるのかという考えもある。

今回のオリンピックも、開催しないほうがいいという人と、開催すべきだという人の立場が違った。次元の違う話をしているから絶対行き合わない。こうした葛藤と分裂が考古学者の中でも起こっていたんです。



そうこう考えているうちに、また新たな説が見えてきた。病原体は侵略者が持ち込む前に、もともと国内にあったもので、【1】が祈りを捧げていると、そこにマスクである【3】がやってきて、彼らは「祈りよりもマスクだ、それが重要だ」と説いたのではないかと。

そして気づいたんです。【1】と【2】は血縁関係にあることを。よく見ると、体の模様も似通っているし、耳と手にも同じような特徴が見られる。よく見ると【4】の変異株も同じ特徴がある。つまり、土着民と病原体である伝染病は血縁関係にあることがわかった。同化して、取り込んでくんだね。一緒に生きてく。変異株の人間になっちゃう。

そうして見ていくと、変異株の人間たち、そしてマスクの間にはすごく断絶感が出てきました。防ぐためにマスクはあるのに、今やっぱり異物として扱われていって、かわいそうだと思うようになる。交わることがないんだね。

そういう視点で【3】を見ると、なんだか情けない

顔に見えてくる。下唇をつき出して、いじけている。顔がないから感情が読めなかったけれど、どこか寂しげにすら見えてくる。考古学者はこのマスクにどんどん感情移入していったんだ。

すると、悪病退散のために祈りを捧げていたと思っていた【1】が突然凶暴な存在に感じられたんだ。そして、たいへんなことに気づいてしまった。最初は土着民だと思っていた【1】こそが侵略者ではないかと。【3】のマスクこそが土着民で、侵略者として【1】が入ってきて君臨した。そう気づくと、【3】は毛糸のセーターを着た鉄仮面のようで、頑なに自分の中に閉じ籠もっている。それに対して、残りの3体はにゅるにゅると自由に触手を伸ばしている。そして気づくんです。この地層の文化は、多様性を許容したいいわば元祖民主主義を発明した現代人の正当な祖先なのではないかと。

このように視点を変えると、関係性がどんどん変わってきます。視点が変わったことで、自分の考え

方も変異してしまった考古学者は、歴史が変わる瞬間を体験してしまったんだね。

疫病から発した過去の大試練を様々な見解として拡散させることで、その悪魔的衝撃を和らげているんだと考古学者は自分に言い聞かせました。しかし考古学を逸脱してそこまでの論を張っても、タリバンやミャンマーの軍事政権は耳を貸さないでしょう。新型コロナ分科会の尾身会長に訴えても「今そういう抽象的なことを言われても」とか返ってきそうです。

とうとう考古学者は、セーターの上に手製の鉄仮面をつけて「大地に還るんだ」と意気込み、山梨で畑を耕すようになったそうです。自らが「変わり者」になって村人たちの共生実験を試みているとか、いないとか。

たまに声をかけてくれる人もいますよ。す。「それ被っていいことあるなら、俺も真似してみよかな」と。そんな問いに考古学者はこたえます。「なんにもない。暑くて重いだけだ」と。とりあえず村にはまだ広まってません。



今回の共演者

## 鎌江一美 / KAMAE Kazumi (1966-)

滋賀県在住。1985年から〈やまなみ工房〉所属。思いを人に伝えるのが苦手な彼女は、コミュニケーションのツールとして振り向いて欲しい人の立体を作り続けている。モデルはすべて思いを寄せる男性。最初に題材を決め、原形を整えると、その表面全てに細かい米粒状の陶土を丹念に埋め込んでいく。完成までに大きな作品では約2か月以上を要することもあり、無数の粒は作品全体を覆い尽くし様々な形に変化を遂げていく。



5



6

1,5 「かお」 / 606 × 238 × 227mm / 陶土、自然釉 / 2007年 / 日本財団所蔵  
2 「かお」 / 233 × 225 × 212mm / 陶土、自然釉 / 2007年 / 日本財団所蔵  
3,6 「かお」 / 483 × 213 × 200mm / 陶土、自然釉 / 2007年 / 日本財団所蔵  
4 「かお」 / 538 × 310 × 248mm / 陶土、自然釉 / 2007年 / 日本財団所蔵

## DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

### 編集後記

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会が閉会しました。これほど賛否両論のあった大会はなかったのではないのでしょうか。しかし、私はパラリンピックの開催は特に大きな意義があったと感じました。かつては「オリンピックは参加することに意義がある」と言われていました。これは、勝敗に固執するあまりに陰悪になったムードを払拭するために、アメリカの司教が発言したと言われています（後にクーベルタンが引用し世の中に広まった）。パラリンピック競技を見て、この言葉を思い出しました。フィールドには義足で跳ぶ人や走る人が、道路には疾走する車椅子や盲目のランナーが、プールには手や足のないスイマーがいました。それぞれが、自身の最大限のパフォーマンスを発揮すべく、競技に取り組んでいました。記憶に残っているのは、メダルの色ではなく、選手たちの圧倒的な存在感です。

今回の『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』は『ともにかける』。アートが生まれる場所で伴走している人たちにも目を向けて欲しいという思いで企画しました。「人はひとりでは生きてはいけない」という言葉は、やや使い古された感があります。しかし、アートが生まれる現場取材して、やはりひとつの真実なのだと感じました。共に生き、共に走るから、遠くの地平まで行くことができる。編集作業を続けながら、私たちもアートを生み出す人たちと共に走り続けなければと改めて思いました。

webメディアと連動し、障害のある人たちの表現活動や、それを取り巻く文化を紹介しながら、新しいプラットフォーム作りを目的としてきた『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』も今回で10号の節目を迎えました。これも読者の皆様のお支えがあってこそ。ぜひ、共に走って行きましょう。さらに遠くまで(ダイエットを兼ねて本当にランニングを再開しようとも考えています)。

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

編集長 井上英樹

DIVERSITY IN THE  
ARTS TODAY



発行：2021年11月1日  
発行元：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS  
住所：東京都千代田区神田神保町1-6 神保町サンビルディング4F  
電話番号：03-5577-6627  
編集：井上英樹、岡田カーヤ (MONKEYWORKS)  
アートディレクション&デザイン：TAKAIYAMA inc.  
表紙：中村真由美  
表紙撮影：森本菜穂子  
校正：鷗来堂  
印刷：朝日プリンテック  
©2021 The Nippon Foundation DIVERSITY IN THE ARTS